

《書評》

『ある在日韓国人クリスチャン家庭の百年：大阪・林家の生活史』

石川亮太* 著、かんよう出版、2025 年

イ ソンジョン
李 省展†

著者の石川亮太氏は1974年静岡生まれ、現在、立命館大学経営学部教授である。主著に『近代アジア市場と朝鮮：開港・華商』（名古屋大学出版会、2016年）等があり、在日コリアンの印刷業をも研究対象としていることから、林家と姻戚関係を有し、印刷業を営む高仁鳳氏に関するライフ・ヒストリー関連の論考がすでに存在する。本書の構成は以下のとおり。

プロローグ

- 1 章 朝鮮北部のクリスチャン家庭で：李順謙の生い立ち
- 2 章 全羅北道から大阪へ：林学周の生い立ち
- 3 章 大阪で家族をつくる：戦禍の中の林家
- 4 章 南方の家で：林家の戦後
- 5 章 二世たちの時代：1960年代とその後
- エピローグ、158の注、あとがき

著者は、2022年に故・林包球さんの大阪北部教会納骨式に参列し林家の人々と出会うこととなるのであるが、前年に印刷業を営む高仁鳳氏の資料整理を手伝う中で、高氏のパートナーである林芳子さんから林家の歴史を綴る兄・林包球さんによる手記「両親の歩み」（父親・林学周、母親・李順謙著の半世紀を含む）を受け取ったことが執筆へのきっかけとなった。クリスチャンでない著者は、他の在日コリアンの自伝などには見られない、教会との関りの深さに驚き、「これらの人々は、どのようにしてクリスチャンとしての人生を選び取り、何を考えて生きてきたのだろうか。そのことは、在日コリアンであることとどのように交差していたのだろうか」という疑問を抱くこととなった。

このような問題意識から「林家の人々自身が語り、書き残した記録を歴史的状況と突き合わせながら読むことで、在日コリアンの歴史の中にクリスチャンとしての生き方を位置づけてみたい」という思いが本書執筆への動機となった。本書は林家三代に渡る広範囲な資料収集ならびにインタビューなどを重ね、まとめ上げられているが、紙幅の都合上、内容紹介は、林芳子の祖父、母と父、本人を主

* 立命館大学経営学部 教授

† 恵泉女学園大学人間社会学部 名誉教授、国際日本文化研究センター 客員教授
sj-lee@keisen.ac.jp

として以下に記すこととする。その際にキリスト教史を含めた本研究の意義について言及したい。

家族の歴史

本書において林家の歴史は林芳子を起点として叙述され、ファミリーの歴史は祖父の李致洙（1867年咸境道生まれ）から始まる。李致洙は儒教知識人であったがキリスト教に関心を示し、36歳にて入信した。聖職者となる道を選択し、米国北長老派の平壤神学校に入学、1910年に第3回卒業生27人中の一人となる。著者は、手記に挟み込まれてあったメモから、李致洙が伝道開始以前の1904年に平壤へ移動し、ブレア宣教師（William E. Blair）の活動を補佐するとともに、朝鮮語を教えたと明らかにした¹。その後、李致洙は平安南道肅川の教会に赴任するとともに教会敷設の養信学校を設立した。本書によると養信学校では独立運動1周年を記念する1920年3月2日に独立万歳を高唱、示威運動を開始すると李致洙は直ちに逮捕されたという。また平壤神学校地下にて大韓国民会の組織化を図ったとされ逮捕されている。「クリスチャンであるのと同時に民族的な信念のもとで教育を施し、運動に参加していた」との家族の推察が付記されている。

以上、林芳子の祖父の歩みの一端を紹介したが、朝鮮キリスト教史の文脈と照らし合わせると、平壤神学校の卒業生の歩みが明らかになった意義は決して小さくない。平壤神学校は独立宣言署名者の一人であった吉善宙、また韓錫晋などキリスト教史の文脈からすると錚々たる人材を輩出している。本書によりその3回生の進路の一端が明らかになった。また神社参拝への抵抗で著名なブレア宣教師の語学教師となったことも特筆されるべき事柄と考えられる。平壤は当時「東洋のエルサレム」と称され、世界最大規模の伝道拠点（コンパウンド）であった。この平壤におけるキリスト教の隆盛は、次に述べる林芳子の母親の人生にも大きく影響したといえよう。

母・李順謙は1909年生まれで、父親が創設した養信学校に学ぶ。平壤の崇義女学校に1924年入学、29年に卒業したという。苦学生で刺繍などを製作、販売して学費としたとしていることから、評者は午前中働き、午後に修学する「半工部」に所属したと推測する²。

2023年8月14日に著者は、林芳子らとソウルに再建された崇義女子高校にて現地調査を実施するものの、卒業生の中に母親の名前を発見できなかった。また1929年の卒業アルバムにも名前がなかった。その後、崇義女子高校がメール添付で送信した数百枚の写真データから林芳子がスヌーク校長とともに写る李順謙を確認している。早婚の風習などで入学者の10%ほどしか卒業していなかったが、李順謙も何らかの理由で卒業に至らなかったと推測されている。この現地調査は、林芳子と著者のみならず、他の研究者とともに実施されており、著書が綿密な資料調査と堅実な資料批判に依拠しているものと評価したい。いずれにせよ、当時の平壤での教育環境ならびに家庭環境は李順謙のアイデンティティ形成に大きな影響を及ぼしたといえる。李順謙は、1936年に渡日し、林芳子の父・林学周と結婚した。

林学周（1899年、全羅北道淳昌郡生まれ）は1914年に淳昌公立普通学校を卒業、21年には京城中東学校中退している。没落両班の長男として普通以上の教育を受け、ソウルに出てからは夜学に通っ

1「無給で奉仕するその暮らしは楽ではなかった」とされているが、この推測には疑問が残る。宣教師資料には語学教師には支出がなされていたともされていることから、そうでない可能性がある。

2 崇義女学校は北長老派のミッションスクールで、その教育政策は、初等教育は現地の朝鮮人教会が、中・高等教育は宣教師が主体となって経営するシステムが確立されていた。北長老派ミッションスクールはキリスト教指導者の養成を主眼としており、これはソウルのミッションスクールがエリートを養成したのとは対照的である。

た。1928年に日本へ渡航した。下関では「タコ部屋」での土木工事の重労働に耐えかね逃亡、広島で親切的な日本人と出会い農業に従事。その後大阪へ移動し、メリヤス工場で働いた。当時大阪には朝鮮人が全国1位の約8万人（全体の25%）居住しており、東洋最大の工業都市の二次産業で多くの朝鮮人が働いていたと明らかにされている。父親・林学周の入信動機については、工場の同僚から韓国人（朝鮮人）教会を紹介され、「お嫁さんを世話するから」と誘われて、出席当日から単純に信じるようになったという。林学周の証しには「信仰は忍耐と継続が大事」であるとされ、不思議なことに慢性胃腸病が八か月で癒されたと記されている。著者は「教会は信仰の共同体であるのと同時にエスニック・マイノリティの共同体としての意味も期待されたはずである」と延べる。林学周は大仁教会に通ったが、この教会は合併を経て、1949年に大阪北部教会となった。

本書は金禹鉉、金泰俊など中央神学校校留学生らが教会設立に大きな役割を果たしたことを明らかにしている。林学周は康泰民伝道師に導かれ、文宗洙牧師より受洗したが、二人とも中央神学校卒業生であった。著者は、中央神学校の卒業生277名中朝鮮人が37名であると資料に基づき推測するが、著者がこの神学校に着目したことは特筆に値する³。

母・李順謙は崇義女学校を終え、富士見高等女学校にて日本語を勉強、官費留学生を目指す、希望をかなえられなかった。父親が1932年に死亡すると、写真交換だけではあったが、林学周を信仰へと導いた康泰民の仲介で結婚した。1936年3月3日、大阪の大仁教会で挙式し、計5人の子供を出産した。林学周が大仁教会に居住するなど、教会が「在日コミュニティの核」となる姿が読み取れる。受洗から1か月で林学周は執事に選任。二人とも在日社会の中では高学歴であった。

戦時下の教会の苦難

本書ではまた戦時下の教会の苦難が綴られている。1933年12月、大阪東部教会は夜学の全廃を命じられる。これは左翼系の朝鮮人夜学弾圧の延長線上であったとされる。日中戦争が始まった1937年、教会の日曜学校の子供たちが中津署を訪問し国防献金を奉じている。1940年には在日朝鮮基督教会が解体され、日本基督教会へ合同することとなるが、その後、①信条に服する、②日本語使用、③教職者の再試験などの条件下で41年5月に日本基督教団に合同した。国語讃美歌、聖書の使用にあたっての学習会が実施され、特高警察の監視のもとに置かれていた。林学周が長老に将立される（1942年3月1日）が、日本人牧師の森田殿丸牧師による接手を受ける。1945年、大仁教会が建物疎開命令により取り壊され、南方教会（前三十三教会）へ移籍した。

1944年12月から大阪に約50回の空襲があり、大阪の戦災者数約102万5千人のうち朝鮮人は8万3900であることから、朝鮮人の死者は、大阪空襲での死者1万5千の8.2%、1230人と著者は推定している。夏の暑さにも関わらず、暑い綿入りの頭巾をかぶって淀川沿いに避難した折、林学周は空襲と関東大震災の記憶が重なり、虐殺の悲劇の再来を危惧したとある。解放の日を迎えると猪飼野の朝鮮人らは酒を飲み歌い踊る。「日本は負けた、日本は負けた」と林芳子の姉・貞姫ははしゃいだという。

大阪南方の家は狭い長屋で貧乏世帯であったが「神の恵みのうちに守られて暮らした」とされている。

3 神戸神学校と大阪神学院が合併し中央神学校が1927年創立されるが、初代校長はサミュエル・フルトン（Samuel Peter Fulton）。彼は明治学院で植村正久と対立し、南長老派は神戸に拠点を設ける。南長老派は神社参拝を徹底的に拒否し、息子のダービー・フルトン（Darby Fulton）の声明により朝鮮の南長老派はいち早くミッションスクールを閉校するなど、植民地期朝鮮の神社参拝問題に大きな影響を与えた。

水道は屋外、夏には蚊帳。空地での野菜作り、鶏小屋。壁と天井、和紙で断熱するなどの生活知恵がみられる。親戚がなく法事もなかったが、家庭礼拝が守られた。正月は餅とマンドウのスープ、ワカメスープを食している。周辺に住む人の3分の1は朝鮮人であった。林学周は軍需工場勤務であったが、戦争終結により失業し、その後、土木、ゴム修繕、廃品回収、日雇い労働にも従事、雨が降るとキリスト教関連の読書を楽しんだ。

戦後の歩み

戦後の二世たちの歩みは、祖国が分断状況の中、また日本社会の民族差別などにより複雑なものとなった。分断の影響で在日朝鮮基督教会が在日大韓基督教会と改称され、南北政権の樹立によって日本の外国人登録も朝鮮、大韓民国と分断されていく。母・李順謙の手記には、韓国の経済成長を喜ぶと同時に「北では多くの同胞たちが悲惨な日々を過ごしています」と記されている。4・3事件により日本への避難民が増えるとともに、朝鮮戦争をへて、南北対立が激化する中、キリスト教会の反共意識が高まっていくが、著者は南と在日教会における反共意識の高まりを、北からの避難民が中心となった永楽教会を創設した韓景職牧師と結び付けて説明していく。彼は「北朝鮮の政権の殲滅がキリスト者の使命」とまで語った。しかしこのような暴力の連鎖に、同じ街に暮らす日本人がどれだけ気づいていたのかとの著者の開かれた問いかけに研究者としての資質を見ることができる。

1959年より始まった北への帰国運動について、林芳子は高校生修養会で「自分で決めて自分の祖国に行くのに何が悪いんですか」と発言した。それとは対照的に、在日大韓基督教会は「北韓送還」に反対を表明した。日本政府が人道主義の名目で「送還」を実施することを非難、差別的待遇を撤廃し、安全な生活の保障を求めたとある。著者はここにおいても背後に存在した日本社会の差別待遇を見逃してはならないと看取する。

弟の林季成は韓国青年同盟の専従として活動し民主化と統一を目指した。「分断国家はどの国からも尊敬されない」とし民主化運動に一途に取り組む姿勢は両親から受け継いだものと、妻の元由美子の証言が付されている。死の間際に神を信じるかと妻が聞くと「信じる」と答えた。著者は日本で人として尊重され主体的に生きようとし模索してたどり着いた彼なりの結論であるとしている。

兄の林包球はカナダ移民を選択したが、この背景にはカナダ長老教会・連合教会の在日コリアンへの宣教があることが本書で明らかにされている。

林芳子は日本で定住外国人となる選択をし、人権保障に取り組んだ。「キリストに従ってこの世へ」(1967年、在日大韓基督教会総会決議)を実践し、他のマイノリティと手を携えて社会的課題に取り組む、大阪教会二人目の女性長老となった。通称名使用の風潮の中で、林家の人々は本名を守り続けた。指紋押捺制度反対運動では通称名抹消を申し出ており、指紋押捺を拒否した。「消えていく在日一世の命と向き合う両親の姿を見て、林芳子はクリスチャンであり続けることを選んだ」と著者は記している。

大阪教会信者の多数は「伝統的宗教ネットワーク」から外れた人々であり、「本人の自発的選択」を基礎としながら家族を通じて教会が形成された、とする飯田剛史の論議を補助線としながら本書は以下の結論へと導く。

林学周、李順謙の二人が歩んだ道を「『自発的選択』と言い切っているのだろうか。強いられたものとのみいうべきではない。神の導きであるという信念を含め、よりよく生きることを求めた本人の選択の尊厳を見失うべきではない。[……] だからといって [……] 経験した苦しみが自己責任であっ

たといって良いわけではない。その苦しみの多くは植民地支配という状況がなければ経験しなくて済んだものである。[……] 日本人への非難や恨み言はほとんど見られない。しかし植民地支配の圧力がそれほど重いものではなかったと解釈してはならない。二人が伝えなかったのは自分たちが主体的に選んだ暮らしと信仰への誇りであったのであり、その背景となった状況を読み解く責任は現代のわたくしたちの側にある」。

本書は152頁の比較的小著であるものの、エゴドキュメントに依拠し、教会資料、総督府統計、自治体統計、キリスト教史、朝鮮史、在日コリアン史の二次資料など、豊富な資料を駆使して、ミクロな物語をマクロな状況と接続しつつ、読み手を飽きさせないディスコースが展開されている。在日コリアンの生活文化などの導入が生活史の叙述に厚みを与えており、優れた在日コリアン研究さらには植民地支配、戦後の日本の外国人政策に対する格好の入門書となっている。また、時には「推測」や「推測の推測」を重ね論考を深めながらの叙述スタイルと、それにともなう豊富で適切な資料による状況分析が組み合わせられることにより、同時代に生きる人々の全体像をより鮮明に浮き上がらせることに成功している。

評伝や生活史を取り扱うには、研究者の人間性、対象に対する真摯な姿勢が問われる。先に述べたように「その背景となった状況を読み解く責任は現代のわたくしたちの側にある」とし、あとがきで示されるように、在日コリアンの生活史を叙述するにあたって、著者の両親の歴史的歩みを重ね合わせる。そして「その時代を一つとして引き受け、残された課題の幾分かでも軽くして、次の世代に引き継ぐことは筆者の世代の務め」とする。

「在日コリアンではなく、クリスチャンでもない筆者が」という躊躇に関しては、評者はクリスチャンとしてキリスト教史を叙述するメリットはキリスト教の内側からの理解を促すことくらいであり、護教的になりうる可能性を含むというマイナス要因もあると考える。かえってクリスチャンではない、在日コリアンではないという著者が叙述することのメリットは大きいではなかろうか。もともと研究者は誰でも、多様性の中の個性を担いながら、さまざまな事象に向き合っているからである。

本書の執筆動機を著者は、在日コリアンというマイノリティの中のマイノリティである在日クリスチャン家庭との出会いとそれにともなう驚きにあるとしている。驚きや発見は、研究動機の根底にいつも存在するものだが、驚きが一過性に止まらず、関心を持続し、まとまった成果を出すには、並々ならぬ努力と精神力が必要とされる。その意味でも本書は研究者としての力量を随所にみることができる良書であるといえよう。